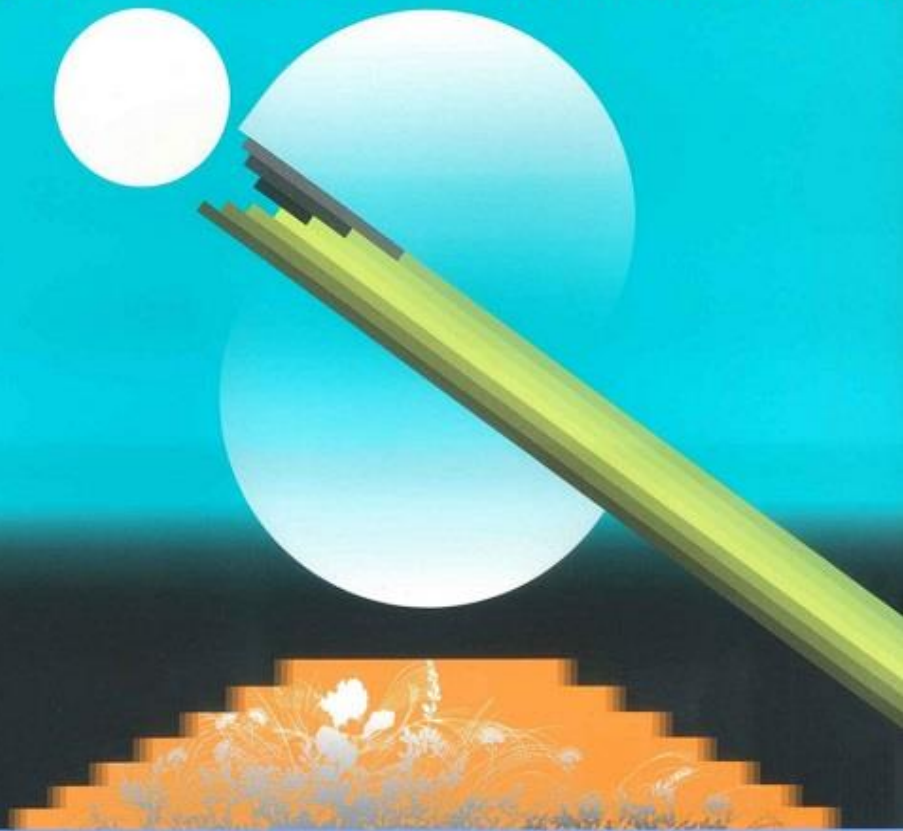


ODAWARA CASTLE OPEN-AIR SCULPTURE EXHIBITION



小田原城野外彫刻展

小田原城野外彫刻展

ODAWARA CASTLE OPEN-AIR SCULPTURE EXHIBITION

会期／平成2年10月7日～11月25日

会場／神奈川県小田原市 小田原城址公園

主催／小田原城野外彫刻展実行委員会・神奈川県・小田原市

小田原城野外彫刻展について

小田原城野外彫刻実行委員会委員

三木多聞

日本における本格的な野外彫刻展は、1960年代前半から30年近い歴史をもつが、この数年來「彫刻のある街づくり」などとも結びついた各地で開催される野外彫刻展の急増ぶりは、驚くほどである。石の産地、鉄鋼業の盛んな街など、地域の特性と関連したりしながら、各地で特色のある試みがなされている。

このような動きのなかで、3年前の1987年に、神奈川県と秦野市が協同して、つまり2つの自治体がタイアップするというこれまでなかった方式で、野外彫刻展が開催された。秦野市の中心を流れる水無川内岸と中央運動公園を会場に、20点の彫刻を設置する「丹沢野外彫刻展」が実現し、大きな反響が生まれた。この企画は神奈川県・山間地区、海岸地区、川辺など各地区で、彫刻設置により独自の地域の活性化をはかろうとする構想で、3年ごとに開催市を移していく新方式を目ざした。今回の「小田原城野外彫刻展」はその第2回目として実施されるものである。

小田原城址公園は小田原合戦から400年の歴史をもち、今日では水と緑に恵まれた、市民憩いの場となっている。この歴史と伝統をもつ小田原城で、意欲的な現代彫刻による野外彫刻展を開催することは、地域と現代彫刻のあり方を探る独自の試みとして、大きな意義をもっている。

開催の形式は「丹沢野外彫刻展」と同様、広く一般から公募するコンクール形式をとる。第1次は50センチメートル立方以内のマーケット（模型作品）による選考が行われた。3月30日小田原市中央公民館の第1次選考には、352点という多数の応募があり、8名の審査員により慎重な審査の結果、実物制作に当る20点を選出したが、入選率5.6パーセントの厳選であった。出品作の制作と搬入にはそれぞれ200万円の補助がされた。

第2次（実賞）選考は作品の設置が終了3月26日に行われた。直前に進出した大型白銅の影響が心配されたが、全くトラブルはなかった。二の丸や鳥屋敷輪の広場、遊藝木門の中庭、堀などの城内各所のさまざまな性格や特色のある環境の中で、ペナランから新選

まで20名の彫刻家たちは、石、アルミ・ブロンズ・ステンレスなどの金属、木、樹脂、ガラスなどさまざまな素材を駆使した大形の彫刻を実現し、マーケットのときの想像や予定をはるかに超える力作、大作が揃ったが、小田原域内の現実の環境が出品作家の彫形意図をいっそう際立たせたものと思われ、すばらしい野外彫刻展に結実した。各作品を慎重に検討したが、内容が充実し、実力面でも豪華は異端であった。大賞1、準大賞1、優秀賞4という賞の数から、まず6名選定の投票を行った。第1回投票の結果、8票-1、5票-1、4票-2、3票-2、2票-4、1票-5と、予想通り得票はかなり分散した。この結果を配慮しながら議論を重ね、点数制を加味しながら第2回投票に移った。投票の際に支持する順位によって、1位-6点、2位-5点、3位-4点、……6位-1点とすることとした。

集計の結果、西野康道「風の中で」35点、戸田裕介「Smash W」19点、守屋信和「AMANOGAWA」17点、望月志郎「Crush Media」14点、奥田淳史「開花COSMIC SPACE」13点、佐藤尚史「四柱×角柱-CIRCLE」10点の6作品が上位得票し大賞-西野、準大賞-戸田、優秀賞-守屋、望月、奥田、佐藤がそれぞれ選出された。

大賞の西野康道「風の中で」は、壁の中に設置されたメタン、ステンレス、鉄の細い針で構成した「動く彫形」で、0.9メートルに及ぶ深さと思わせる作品は、両端をゆったり上下させ、水平に回転する動きを含め、全体の動きは複雑微妙で軽やかである。堅牢な石垣に囲まれた場の中で、その軽やかな彫形は効果的で、独特の存在感が幅広い支持を得た。風-自然のリズムをとり入れながら、複雑微妙な「動く彫形」を追求してきた作者は、小田原域の環境の中で、大形の新しい領域を開拓した。

準大賞の戸田裕介「Smash W」は、ステンレスの四柱の中央部を、重さしい棒状の石で叩きつぶしたような作品であるが、0.9メートルのスケールと端的な表現は、マーケットでは想像できなかった迫力を生んでいた。

優秀賞では、守屋信和「AMANOGAWA」は、このところ取り組んでいる有孔で帯状のステンレスを湾曲させ構成する作品で、大型でカラフルに彫製した2つの彫形を組合せて、壁に浮遊させたのは新しく美しい展開である。望月志郎「Crush Media」は上部に複雑な変化をとり入れた巨大な鏡面磨きしたステンレス作品で、常盤木門の中庭の中央に据え、意外性とともに不思議な魅力を発揮している。奥田淳史「開花 COSMIC SPACE」は、幾何学的な彫形のユニットを巧みに組合せて構築する表現の連続であるが、「開花」を思わせる別個地を著実に獲得していた。佐藤尚史「四柱×角柱-CIRCLE」はさまざまな形の石塊をアーチ状に組み上げた作品であるが、その石積みは石垣のそれと対照を示し、興味深い。

小田原域野外彫刻展では、その特色のある環境が注目されるが、同時に史跡など文化財の保存とどのように調整するか関係も多かったに違いない。展覧会実現のための関係者の努力を高く評価しない。新しい環境での野外彫刻展で、意外な組合せが新しい空間を創造しているケースもあれば、ずっと前からそこに存在していたかのように、環境に溶け込んでいる作品もあったのは面白い。小田原域を見届けてきた市民たちと、現代彫刻とどのような出会いが生まれるか、興味深い。

野外彫刻展と併行して、10月14日-11月4日の期間、緑地公園内常盤木門展示場で、コンクール応募作品のうち、優秀マーケット作品50点（入選30点、マーケット入選20点）を集めて展示するが、この野外彫刻展を支える基盤の層の厚さを窺うことができる。

県と市の協同による「神奈川方式」ともいって、野外彫刻展の新方式は、開業自治体の経済的負担減という利点ばかりでなく、開業地を元々というシステムは、市民と彫刻との関係を拡大し、環境の変化によって彫刻家も新しい表現領域展開の可能性を増大させる。急化する野外彫刻展のなかで、「神奈川方式」の果たす役割は大きい。

図4 四野美術館前広

野外彫刻の魅力—断片的な冗言—

柳生 不二雄

彫刻は、かつて建築に付随したもので、一人歩きしながら屋外に放て、独立していったように思える。一方では、生活に密着した道具や器物から人間の身体がにどまり、作品となっている。

屋外に設置されたものは、やがて記念碑のような巨大さをもつことになる。室内にとどまった彫刻には、裝飾性が強くなり工芸品となってしまうものもある。

芸術的な意味からいえば、作品の大小には全く関係がなく、いいものはいい。当然のことである。

小さな作品でも、大きな空間をしめし、強い環境をもって、人々を圧倒する。スカールだけが大きくとも、無常で、磨きかけのようなかたまりにすぎないような作品も、しばしば見られることもある。

野外に設置される彫刻は、常識的にいえば、ある程度の大きさをもたなければならぬが、強い芸術な存在をしめす。たとえば日本の野矢、道相神などのことを言えば、必ずしもその大きさだけのものではないともいえる。(これについては、前回の井沢野矢彫刻展のカタログで、堀内正和氏も書いている)

美術館休館などの彫刻会場にいくと、無意味なように考えられる大作(労作)が、目を見張るように孤立している。どうして、このような狭い場所に、武山の作品が展示されることになったのだろうか。美術団体のそれぞれの事情があることは理解できるが、作品がもつ空間と環境、動きなどが相互に押し合いながら、重複してしまったように感じられ、観客は苦悶感を味わう。会場の貸借もあるが、作家のエゴイスタックな自己顕示欲とでもいえるものなのだろうか。可笑げな作品たちだとも思えてくる。

その点、野外に設置されている作品は、ゆったりとした周囲の空間を占有して、他に傾けられることなく主張できる。もともと、作

品自身の質と内容であるが、彫刻作家にとっては望ましい場だろう。

野外彫刻で問題となるのは、この周囲の環境、自然に対する心理的、物理的な配慮が必要となってくることだ。観る者にとっては、この条件に対する作家の意識が、また一つの興味ともなっている。

最近、テーマをもった野外彫刻展が、公募、指名などの形式でよく開催されている。自然環境についての問題点やその社会的意識をテーマに作りこんで設定しているところが多くなってきた。野外彫刻には、単に作品としての純粋性をもとめられるだけでなく、社会的な共感とか格闘としての意味をもたせられてきている。一般の美術展のように、展示することによってすべてが完結し、特定された目的をもって来場する観客だけを対象とするものと少し異なっている。むしろ、不特定多数を想定する公共性が問われている。

現代の美術彫刻は、美術であるために、既成の造形的な考えを捨てていこうとするところに意識が込められている。芸術の反体制的姿勢といってもいい。この新しい彫刻思考にたっている以上、一般の社会意識からみると馴染めないものがあるだろう。社会との不協和音が、野外彫刻、特に抽象的、前衛的な作品に対して、不満の声となる。作品を動かしろといった発言があったり、苦情をもちこまれる。公共性の強い広場や古くから愛着をもたれた緑豊かななかで起りやすい。

甚だしく公共生活の利便を阻害したり、身体に直接、危害が加わると思われる作品は別としてこれにも一定の基準などはないが、一つの試みとしてなるべく許容してもいいことではないだろうか。

また、このような問題が起ったときには、作家を交じえた建設的な議論がなされるべきであろう。それが、一つの文化的な意味をもつことになる。日本では、これがあまり行われていない。

かつては、抽象彫刻を設置すると「おかげが分らない」、「くだらないものに金をかけて」といった非難の声があがっていたこともあった。また、権威には女性蔑視、男せつなどという意味不明な論議がなされた。いまでは、さすがにそんなことはないが、野外彫刻に対す

る理解は深まりつつも、なにかと設置者の善意を傷めるものも持っている。それが、一つのアクションとなって、いろいろな野外彫刻が社会に浸透していくことが面白い。

制作者が野外に設置することを考えていなかった作品が、たまたま置かれてしまうこともあるが、今回の彫刻展のように、始めから一つの環境、状況を設定されている場合が多い。作家は、自分の想像力と設置の場を巧みに融合させながらデザインしていくのだろう。あるときは、地域の風土性、歴史的なイメージなどが、その要素のなかに加えられる。この要素が強く働きすぎると、妙なモニュメントになってしまう。

作家たちは創造の意志を前面に打ち出しながら、調和させようとしたり。また、反響をみせて存在を相互に強調したりする。コンクール賞では、街内に一点だけ置くと異なっており、ほかの作品との比較になるから自己主張、表現がより個性的でなければならない。注文制作ではないので、制作者も限定があるだろう。その限度のある大きさと材料費のなかで充足して、最大の効果をみせることになる。

よく、コンクールの賞を貰う作家がいる。コンクールの審査員のメンバーを調べて、作品の傾向をさめたり、最小の費用でアピールするような制作をしたりしていた。この頃は理想による1次審査が多いので、模範の作り方が綺麗になり、審査員の気をひく。そんなことで幅をきかせるようなことはないのだが、一つの風潮としてみえた。

作家も、それなりに苦労しているのだが、結論的にいえば、いろいろなネックを乗り越えて制作に打ち込んでいる。作品自体からは、深い魂えない裏の制作活動といえるものがある。また、制作の過程でも、制作活動にはつきものではあるだろうが、いろいろなエピソード的な苦勞話を聞く。作家たちは一所懸命なのだ。設置された作品は、自然のなかに融けし、自己の存在を誇示したり、とりまきしているようであるが、その内部には劇的なドラマがひそんでいるの

かも知れない。ともかく、野外彫刻の制作は本気にならねばなるほど大変なものである。野外彫刻のなかにそれを感じたいものだ。

地方自治体が文化行政という視点から、都市の再開発、むらおこし運動をするようになって、野外彫刻の設置や野外彫刻展を企画する。美術が公共的なことだと、広い基点をもちながら進出していくことは結構なことだ。メネズ協会のように、企業が結束して文化振興のために、利益を社会に還元することに賛成である。たしかに、誤いのあるまちや作家たちに活力をあたえることになる。恐ろしいのは、ここに妙な権威づけや評価が生まれて自由が失われてしまうことである。どのようなことがあろうとも、作家の自由は奪われたいものだが、そうとは言えない不安がある。それには、スポンサーの意思だけでなく、後援者もからんでくるかも知れない。

野外彫刻の設置には、作家の強い主張とその尊重が主体となっているが、時としてスポンサー、建築家、造園家、批評家などが関与してくる。相互理解と密着な意思の疎通が行われなければならない。これが上手に運営されている野外彫刻は、気持ちがいい。いづれにしても、景観のなかに設置された野外彫刻は、あるときは一つの調和をみせながら大きな空間を構成し、また、いまままでになかった新しい情景をもたらす。しかも、地域のシンボルともなり、記憶としての場の役割を果たす。制度的な社会にあっては、新鮮な息吹きともなる。都市の景観ともいえるだろう。

小田原は、城壁をもった歴史の古い都市である。ここに設置されていく作品は、現代の造形精神を象徴しているものだ。もしかすると、景観の景観によって作品は作家の誇り得なかった表情をみせることもあるだろう。異和感もなく深く受け入れられるかも知れない。気がつかなかった都市空間が広がり、未来にかけられた夢がみられる。こんなことも野外彫刻の魅力である。

渡辺洋平
小田原野外彫刻展審査員

小田原城野外彫刻展

ODAWARA CASTLE OPEN-AIR SCULPTURE EXHIBITION



西野康造 西 NISHINO KOZO

風の中で 風 it is blowing

チタン、ステンレス、鉄
1915 1915
H 180 × W 900 × D 900

1951 兵庫県立生まれ

1978-79 ヨーロッパ、北アフリカ、中近東、ア

ジアの遺跡等訪問

1981・84 京都美術展

1983・86 現代日本美術展

1984・88 日本国際美術展

1985・87 ヘルシー・ムーブメント展

1988 横浜（文庫）

1988 神戸国際現代美術展

1989 オトダビエンチナル

現代日本美術展（宇都宮）

今日の芸術（1994年芸術春秋）

どこからだったのだろう、遠いところからやっ
てきたような気がする。なぜここに降りたか
わからないが、しばらく休んでいこう。





戸田裕介 ■ TODA YUSUKE

Smash VI

ステンレス、木小松石（高崎産）
H 145 × W 550 × D 500

- 1997 広島県生まれ
1998 第一回行動美術展（第3期展覧、第3期入賞受賞）
1998 熊谷野村美術館（さいたま博覧会記念・埼玉展熊谷市展）
武蔵野美術大学造形学部彫刻学科卒業
武蔵野美術大学造形水木富山賞受賞
高崎英人と共に「人間×町並み展」主催（群馬県山田郡大田町）
1999 小川村美術館小川鎮整備計画の一環として作品設置（小川の）
第4回同級展（佐賀県さいたま39）
『さいたま鎮並み展「ロード」』に作品設置 埼玉町賞受賞（埼玉展熊谷市・埼玉県・佐賀県）
第5回小平彫刻美術館（東京都小平市中央公園）
1999 行動美術新人賞受賞（北沢陶芸画廊）
武蔵野美術大学大学院美術専攻彫刻コース修了
小川村美術館鎮並み館に彫刻制作台設置（小平市）

作品が出来る上で行く事よりも、制作そのものが一番面白い。自分の性質と文字どうり体力としての力量、器量がストリートに作品と自分との間で跳ね返る。素材をなだめたり、すかしたり、時には隠伏せる。日々の真直ぐな暴力。





守屋行彬 MORIYA KOSHIN

AMANOGAWA

ステンレス・ウレタン装置
H 150 × W 2000 × D 1000

- 1962 東京朝二生まれ
1969 早稲田大学造形卒業
1971 第1回展覧 (シロタ納税)
第1回毎日現代日本美術展 (東京美術)
1972-76 "Catastrophe and Structure No.1
Foundation" 自作出版 (全5巻)
1974 第2回シヤパン・アート・フェスティバル
(セントラル・オーストラリア)
1978 "カラー・アート・テイクアウト" (グラフィック
社) 出版
1981 写真における風景・音響・録音展 (プラハ
国立工芸・オストラワ市文化会館)
今年作家展 (横浜市民ギャラリー)
1983 第14回展覧 "Shifting Series" (スタジオ
ハウス美術展)
日米文化交流現代日本美術展 (メロウモン)
現代日本美術展 (台北美術展)
第16回展覧 "ARABESQUE Series No.2" (オ
ス・ギヤラリアー・ギヤラリアーK)
1987 "Using THE SPACE" 展 (The SPACE) (社
)
丹波野村彫刻
1988 第11回神戸国際現代芸術展
1989 第1回東京野村現代彫刻展
大CT (加) 5ヶ年・第1回日本彫刻新展
1990 第50回展覧 "JAPAN OMAZOTOLOGY SERIES"
(社社2・オス・ギヤラリアー・オス・オ
ト展)

公共の場に設置される彫刻は、造形美もさることながら、作品が置かれる環境、市民の意識、地域の歴史を含めて、人々の生活と密接に関わるものでありたい。その意味で、大空にあって小島原城の興亡をみつめてきた AMANOGAWA が、華やかな彫刻を喜びて庭の窓の透れの上にとりつけたう姿を想いつつ、私はこの作品を制作した。





望月志郎 ■ MOCHIZUKI SHIRO

Crush Media

ステンレス

H 300 × W 300 × D 140

- 1942 横浜中生まれ
- 1966 多摩美術大学彫刻科卒業
- 1967 第1回個人美術館開館(横浜中込ギャラリー)
- 1967~74 駐米 New York 滞在
- 1966 第1900現代美術展(文化庁主催国内各施設巡回)
- 1967 個展(愛宕山内閣・東京)
- 1968 個展(ギャラリー・ニッポン・東京)
- 1988 第3回社会(アート・アニュアル)参加(神奈川県立歴史ホール・ギャラリー)

進まじい程の現代社会の発展は、ともすれば人間が自ら滅亡へと進んでいるかの感がある。この光どの様な楽しみ方をするのか私には知る由もないが、今を知るには日常品にするクラッシュされた物の中に見る事が出来ると思う。その中には未来を暗示するクラッシュもある。文化とクラッシュメディアは別々に考えらる事は出来ず一体である。強い突えれば文化が削ければ Crush Media (クラッシュメディア) は存在しない。





鹿田 淳史 ■ SHIKATA ATSUSHI

関花 COSMIC SPACE ■ BLOOM-COSMIC SPACE

ステンレススチール
H 210 × W 290 × D 150

- 1968 京都市に生まれる
- 1991 金沢美術工芸大学彫刻科卒業
第1回びんこ現代美術優秀作品展
メキシコ国立自治大学造形学部大学院
(UNAMキャンセルロス美術学校) 入学生、
彫刻及び複製芸術を専攻
- 1992 メキシコ国立自治大学(UNAM)の本部で
大学院がスタートして初展(メキシコシティ)
- 1993 個展ギョウワームメルトアップ(メキシコシティ)
- 1995 第2回SHOGBOX国際彫刻展
シバウイ大学、オクフォード大学美術科、
オックスフォード美術科、ペンシルベニア大
学美術科他10ヶ所(アメリカ合衆国)
個展ギョウワームアップワンマルティン(メキシ
コシティ)
第4回ヘンリー・ムーア大賞展(長野)
第5回ヘンリー・ムーア大賞展(長野)
第1回現代日本彫刻展優秀作品展(中国)
個展「ラファエル・ワト」展(メキシコ
シティ)
- 1998 芸術人100周年記念研修センター野村動物
園にて個展受賞
第1回神戸国際彫刻公開現代美術展で平部
の彫刻彫刻賞特別賞受賞
第3回「ニアチュール・アート」国際展(ト
ロン)、(香港)
- 1999 第4回ヘンリー・ムーア大賞展(ニュージー
ランド)特別賞受賞
流石のオックスフォード国際彫刻展で大賞受
賞(英国)
大塚アトランダム(彫刻)展で優秀賞受賞

開かれた世界、越えず一定の法則の中で運
轉する宇宙、自然界。

幾何学的造形による抽象的な構成をバブリッ
クな空間、又は、小規模な周辺に設置するこ
とで、伝統的な造形物との対話を生み出すこ
ととするものであり、視覚的調和とエネルギー
を与える作品であることも信じるものである。





佐藤尚宏 ■ SATO TAKAHIRO

円柱×角柱 — CIRCLE —

白尾園台（福山石）
H 300 × W 600 × D 90

- 1984 新潟県生まれ
1988 京都府立大学特待美術科卒業
美術、石造造形・石彫シンポジウム等々
てまわる
1998 帰国
かきおろし彫刻コンクール入選
同シンポジウム参加

- ・いろいろなこだわりをもって生きてきたけど、最近ほだんだん減ってきている。
- ・それでもこだわってしまうのが「人間性・人柄」と「それをとりまくもの」で、ぼくにっては前者は「私」、後者は「石」ともおまかえられると思う。
- ・全てを解決し得る智慧を求めらぬ術として、彫刻を選び SHOKU してみようというのがこの数年のモチベーション。
- ・け・れ・ど、現実にはキビシク、たくさんの人々の同士の熱風、今回の作品もようやくとてきた。
- ・死ぬまでにツケを返さなくちゃ、ね。





家住利男 ■ HIZUMI TOSHIO

光と水と空気 ■ Light, Water and Air

フロート板ガラス、ステンレス、スチール、アルミ、シリコン
H 380 × W 120 × D 120

- 1914 熊本県立利達生まれ
1972 熊本県立理工学高校卒業
1982 東京ガラス工芸研究所卒業
個展《京都》
1986 個展《東京》
'86 近代ガラス工芸展 優秀賞
高岡カカフトコンペ'86 金賞
New Glass Review 7
ガラス彫刻展《北古川》
1987 個展《東京》
S.C.F. Glass Workshop in Hokkaido
制作制作
The Art of Japan Studio Glass
《ニューローク》
1988 海外
第 International Glass Symposium
制作制作 チェコスロバキア
1989 横浜彫刻展
1990 今日の彫刻展《熊本県立美術館》
第1回神戸国際彫刻展現代彫刻展
《エスキース優秀作品展》
'90 現代ガラスの彫刻展
《東海彫刻の高度発展》

素材と形体と構造

この二者の関係のなかからこの彫刻は生まれました。





五十嵐晴夫 ■ KARASHI HARUO

蛸庄 (いわくら) ■ IWAKURA

花崗岩 (北木石)
H 120 x W 300 x D 270

- 1950 住居設計生まれ
1952 京都府立芸術大学彫刻科卒業
1956 第5回神戸芸術総合芸術現代美術展
1957 第2回彫刻の森森典給大賞賞 (彫刻)
第1回現代日本彫刻展覧会 (宇都宮)
1976 第8回神戸芸術総合芸術現代美術展 (京都
国立近代美術館賞、東京都美術館賞受賞)
1979 アート・ナウ'79 (兵庫国立近代美術館)
第10回中原淳二郎賞優秀賞受賞
第6回筑波大学現代美術展 (岡山総合文化
センター)
1980 第7回神戸芸術総合芸術現代美術展・スカー
プ賞
中原淳二郎賞100記念展 (短石春)
1981 第1回びわこ現代美術展 (今山石)
第7回筑波大学現代美術展 (岡山総合文
化センター)
1982 現代美術の方法展 (福山市)
建築空間と彫刻展 (マヤコプー山口・東京)
1983 第8回筑波大学現代美術展 (岡山総合文
化センター)
現代美術の方法展 (山口県・福山市)
1984 芸術展'84 支ええる (現代詩・美術) (岡山
芸術総合文化センター)
石を彫る男の人展 (II) (藤岡郷・大塚)
1985 第9回筑波大学現代美術展 (岡山総合文
化センター)
第11回現代日本彫刻展覧会 (宇都宮)
『石の手紙』展 (藤岡郷・大塚)
1986 文庫ナウ岡山 (倉敷芸術美術館)
1987 現代の美術、今日の状況展 (東京島本市民
美術館)
第10回筑波大学現代美術展 (岡山総合文
化センター)
1988 瀬戸大橋架設記念野外彫刻展 (高松市)
1989 かきおかし彫刻シンポジウム
第11回筑波大学現代美術展 (岡山総合文
化センター)
1990 芸術まちかどの彫刻展覧会特別展

本来より石材は積み重ねて、壁面(古代部礼
節)滅石などに使われてきました。積み重ね
るだけでは機能的には限界があり、木組み
の技法である、金輪軸を応用し石と石を縫いで
石自身のフォルムと云うより石で空間を構築
しました。





インターセクション ■ INTERSECTION

橋本和雄・山本秀夫 ■ HASHIMOTO KAZUYUKU・YAMAMOTO HIDEO

ODAWARA

マツ

H 300 × W 500 × D 500

1988 発声 (横浜)

NATURAL MATERIALS 03号 緊急デ
ザン

1990 第3回日本芸術家協会 (東京都美術館)

IMPROVISATION (スタジオ録音)

橋本 和雄

1965 生まれ

1984 神奈川県立厚木高等学校卒業

1988 横浜展 (丸亀電機タイピング・ラボ)

1989 現代美術に与ける日本美術の表現展 (新宿
ムエム)

1990 ミラー・アート展 (新宿ムエム)

現在 東京芸術大学中卒

山本 秀夫

1951 生まれ

1969 東京都立九段高等学校卒業

1972-74 グループ野木津 組成 (北津原町・船
田守広 協)

1974-83 グループ野野野 参加 (谷口 誠・丸
橋内祐 協)

1976 埼玉大学卒業

1980-84 グループコンテナー 組成 (サナダ
アサ・丸橋内祐 協)

現代日本美術展・日本国際美術展・行動展・
神奈川県美術展他グループ展多数

作品へ向けられた視線は、作品を通り経して自然と人間によって造られたトータルな《場》へと向かい、《場》が感覚される、そのような《場》の顕在化を空間域という《場》で試みる。この作品は、いわば《場》を感覚するひとつの装置である。





太田明希 ■ OTA AKIKO

エッサ・ホイ・サッサ ■ ESSA・HOW・SASSA

石、ステンレス、カシュウ

H 230 × W 600 × D 200

1959 香川豊実より

1964 彫刻家 大田喜太郎より依頼、彫刻制作中
断

1965-69 学芸員としてのアシスタント

1968 ストーンミュージアムイタローヴィンイネキ
ツ (クラフト館)

1969 赤松社中石彫シンポジウム





上別府志郎 ■ KAMANEPFU SHIRO

COMANOGOTOKU

大塚石

H 200 × W 200 × D 120

- 1957 高崎博志より
- 1979 国際文楽年シンポジウム・コメント制作参加
(金沢)
二天宮入道
- 1980 二天宮道扶展出品 住持書
金沢美術工芸大学彫刻卒業 渡辺
アルテ・ニュー (perros, pierre) に対して
高橋浩吉のコメント制作参加
- 1981 スウェーデン工芸美術学校版画科特修課程修了
特選
金沢彫刻展出品
ECS 展出品
個展グループ展等
- 1987 石彫シンポジウム・招待演説参加
- 1989 オブジェ・展覧 (東京 画廊)
鬼舟舟七のための彫刻展覧 (千葉 津田屋)
オブジェ展覧 (千葉 和)
二天宮道 石の芸術展出品
公開におけるストーン・フェスティバル
(北沢館)
- 彫刻家によるドローイング展出品
- 1990 第三回マダソ大賞展マッド・製作展 (新宿
彫刻の森美術館)

私達はあるいは、回転する地球のごとき物
—外界の様々な事実と周囲を保つことによっ
て、存在し得るのではないか。そしてその私
達自身も地球のごときのもではないだろうか

そんなことを考えながらこの作品を作りました。





北嶋一夫 ■ KITAMA KAZUO

ハーモニー ■ HARMONY

花岡竹

H 130 × W 550 × D 450

- 1961 東京都に生まれる
1965-72 新制作演芸品
1967 東京芸術大学大学院修了
1972-76 高杉、ヤマトとキラーン美術アカデミー
彫刻科で学ぶ
1973 国府石彫シンポジウム参加（イサト・ハヤセ
ン / オーストリア）
1974-78 国際野外彫刻展出品（ミラノ / イタリア、
作品群11作）
1975 国府石彫シンポジウム参加（ポルトガル・ブ
ルゴス・スチヴィア）、個展開催（ミラノ / イ
タリア）
1979-83 国際美術展 GRUPA JUNI 出品（ドム
ブラキナ / ユーゴスラヴィア地オースト
リア）
1973 SALON DE MAI 観出品（パリ、フランス）、
個展開催（オランダ / イタリア）
1978 個展開催（東京）
1979 第1回ヘンリー・ムーア入賞展出品（彫刻
彫刻の森美術館、優秀賞受賞）
1984 個展開催（リュブリナナ / ユーゴスラヴィ
ア、オランダ / イタリア、ヴェネツィア /
イタリア、ロンドン / イタリア）
1981 個展開催（ドムブレンカ・ヘルツォーグ / 西
ドイツ、カンブルク・ザール / 西ドイツ）
国際小品展（ビュッセル）観出品（ラヴェ
ンナ / イタリア、全メダル受賞）
1982 個展開催（ランダウ / 西ドイツ、パド・ヴェ
ネツィア / 西ドイツ）
1983 個展開催（ワタシブルク / 西ドイツ）
1984 国際 ART EXPO 出品（パリ / イタリア）
1985 個展開催（ザルツァン / イタリア）
1986 国際彫刻コンベンション出品（オランダ /
イタリア、優秀賞受賞）、個展開催（東京）
1987 国際野外彫刻展出品（豊野町、優秀賞受賞）
1988 芸術 EXPO '88 記念現代野外彫刻展出品
第116回神戸県博覧会公園現代彫刻展出品
1989 8-544石彫シンポジウム参加
1990 関西文化学術研究都市・トクモエ国際彫

刻シンポジウム参加
第2回豊後まちかど彫刻展出品
その他、イタリア、フランス、西ドイツ、
スイス、スウェーデン、ユーゴスラヴィア、
日本などで国際展、グループ展、シンポ
ジウムなど出品、参加多数あり

天然素材で最も安定感と重量感のある石、
それらを縦横に組み合わせ、人間が入り込め
る空間、特に子供たちに遊んでもらえ、大人
も驚かせる憩いの場造りを考えました。
指のゆで心のなごみ潤いのある環境として
の機能美を完成できたかと願います。





剣持和夫 ■ KENMOCHI KAZUO

無題 ■ Untitled

材木、コールドール、クレオソート
H 906 × W 130 × D 125

「CONTINUUM '86」 ビデオカメラ
フィルム(メタル)

『最近何年かの作家展(インスタイルショ
ウ)とは何か』 横浜市民ギャラリー

1986 『国際アート オペラ・トリビュート』 テラ
ブ・オブ・ヤング・アーティストズ展(ブダ
ペスト/ハンガリー)

『神楽川/宮前—平和への対話』 横浜市民
大倉山記念館

1987 『神楽川アート・フェスティバル』 神奈川県
立沢区ホーヴギャラリー
「アート・ドキュメント'87」 横浜国立大
学館

2人展 秘密の夜スタジアム アートプラザ
(東京)

『国際アート オペラ・トリビュート』 ブ
ダペスト、ギャラリー・ドゥ(ブダペスト/ハン
ガリー)

1988 『国際 夏 フェスティバル'88』 (白河
町/山梨)

1989 『Management & Communication 韓国・日本
DRAWING'89』 清瀬美術館(ソウ
ル)

『国際 夏 フェスティバル'89』 (白河
町/山梨)

『現代美術への視点 色彩とモノクローム』
東京近代文化美術館

『現代美術への視点 色彩とモノクローム』 宇都宮野村
別荘美術館(山梨)

『秋の美術展 千葉—都—and人間 調との
対話』 日本コンベンションセンター(墨
田/東京)(千葉)

『第1回千原重雄記念展(千原町/岡山)』

1990 『現代美術の歩み』『物質と空間の交響—
1970年代以降の展開』

神奈川県立長瀬ホールギャラリー(横浜)

『プロイマル・スピリット—今日の創造精
神』 ハル・ミュージアム・アーク/群馬/ノ
ルンデルゼン・カンチー・ミュージアム他
3ヵ所同時

『フォーインダ'90 現代展 第二回展
80年代の日本美術展 フランクス/他
4ヵ所同時

1991 神奈川県小田原市立美術館

2014 中央大学芸術学部美術学科施設科卒業
展覧

1972 十字の両面(東京)
村松尚能(東京)
輪の木の両面(東京)
田村尚能(東京)

1974 十字の両面(東京)
田村尚能(東京)

1975 十字の両面(東京)
真木尚能(東京)

1976 十字の両面(東京)
真木尚能(東京)
ギョクサー(北谷町)

1977 田村尚能(東京)
十字の両面(東京)

1980 ギョクサー・マイケル・バーン(デュッセル
ドルフ)

ギャラリー Duxter (デュッセル
ドルフ)

1981 インデペンデント ギャラリー(東京)

1982 インデペンデント ギャラリー(東京)

1983 十字の両面(東京)
インデペンデント ギャラリー(東京)

1984 PLAN B (東京)
インデペンデント ギャラリー(東京)

1985 十字の両面(東京)
インデペンデント ギャラリー(東京)

1986 十字の両面(東京)
インデペンデント ギャラリー(東京)

1987 十字の両面(東京)
佐野尚能(東京)

1988 佐野尚能(東京)
インデペンデント ギャラリー(東京)

1989 インターホーム・アート・フェア(大阪)
グループ展

1973 『池田幸三』 輪の木の両面(東京)

『近代絵の巻 1』 十字の両面(東京)

『読まれた空間の中で自ら表現』 輪の
木の両面(東京)

『東京 8月』 十字の両面(東京)

『雨も降らないの夜をさそり』 十字の
両面(東京)

『公認』 無題(東京都) (神奈川)

1977 『BODY AS A VISUAL LANGUAGE』
真木尚能(東京)

『日本現代美術史論』 神奈川県立長
瀬ホールギャラリー、90 ランチン ストリー
ト ギャラリー(サンフランシスコ)

1980 グループ展 デュッセルドルフ

1981 グループ展 ミュンヘン/ドイツ

1982 『デュッセルドルフ』

1982 グループ展 インデペンデント ギャラリー
(東京)

2人展 アキカ イカダ ギャラリー
(名古屋)

グループ展 インデペンデント ギャラリー
(東京)

1983 グループ展 剣持和夫ギャラリー(京都)

グループ展 インデペンデント ギャラリー
(東京)

1984 『無題と形迹/びわこ現代美術展』 守山
市第2なごみ広場(滋賀)

『日展 美術+パフォーマンス』 Plan B
(東京)

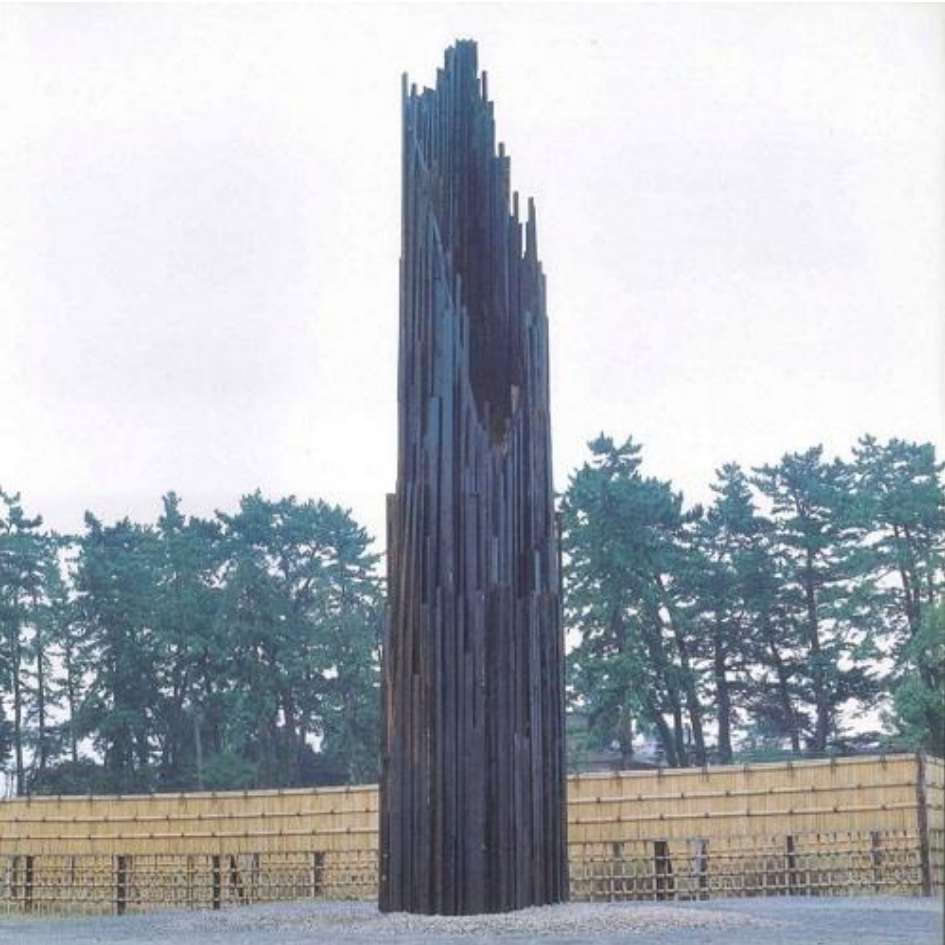
『日展 美術+パフォーマンス』 Plan B
(東京)

1985 『現代美術の歩み—本の造形』 神奈川県
立沢区ホーヴギャラリー

『第1回原山隆典展(エッセイ)』 横浜
山梨近代美術館

『CONTINUUM 1990 EXHIBITION』
日本文化交流(日本現代美術オーストラ
リア支部) せせき3 BSM(後ギャラリー)
国際スペース・メンタル(アート) Plan B
Latino Centre (ブダペスト/ハンガリー)

無題展の中から、好きだった絵柄のよう
なより大きな無題の光の糸を編み入、重ね、
重ね、折り返し、又解きほつ





斎藤史門 SATO SHIGEO

月 MOON

紙張性銅板（コールテン鋼）、ウレタン塗装
H 320 X W 380 X D 200

1984 東京に生まれる

展覧

1989 ギャラリー・エ（東京）

1992 ギャラリー・エ（東京）

ギャラリー・エ（東京）

1992 ギャラリー・エ（東京）

ギャラリー・エ（東京）

ギャラリー・エ（小浜市）

1994 ギャラリー・エ（東京）

1995 ギャラリー・エ（東京）

ギャラリー・エ（東京）

1999 ギャラリー・エ（東京）

1999 岩井画廊（横浜）

グループ展

1990 びんご現代彫刻展、日本国際美術展

1992 日本国際美術展（注存賞）

1993 現代日本彫刻展（宇都宮）

（東京国立近代美術館展）

毎日現代美術展

1994 日本国際美術展（注存賞）

美術館刊ビル（建築家設計）アートワーク

参加

1995 横浜野村彫刻展、日本金属彫刻作家展

1996 東京野村彫刻展（世田谷区公館）

日本金属彫刻作家展（銀座和光）

1997 文芸春秋記念会野村彫刻展

横浜日アート・フェスティバル

1998 文芸春秋記念会野村彫刻展

1999 鎌倉による彫刻家対大衆展

（愛知屋東海亭）

1999 日本金属彫刻作家展

東京オブジェ、コンペティション入選

ハワ・アニュアル展

やわらかい曲線、そして作品に空間を持たせ、
空間の中にあり空間との調和を保つ。
ひとつの形も、あらゆる方向から見るとび
びとつの形からあらゆるイメージがふくらむ
事を望みます。





佐光 廣行 画 SAKO YUKIO

風 韻 breeze

白御影石、自然石玉石
H 170 × W 410 × D 250

1911 岐阜県に生まれる

1962 武蔵野美術学校美術科卒業

1976 ニューヨークの工場で大粒石の彫刻を習得（イ
タリア）

1972-74 一休風出品

1974 展覧 ギャラリーこうけつ（東京）

1976 ビルトゥサマタ国際彫刻展（イタリア）

1977-78 大塚市野外彫刻展（昭和美術展）

1979 東京都立中央図書館、岐阜県立美術館に
作品を出展

1980 東京都立中央図書館のサインの彫刻を制作

1981 展覧 ラブコレーションギャラリー

1982 展覧 ボックスギャラリー

1983 神山邸に作品を設置

1986 サンタミカキ株式会社に作品を設置

1987 津和野左右吉博士記念碑を制作

1988 東京白石の彫刻シンポジウム（東京）

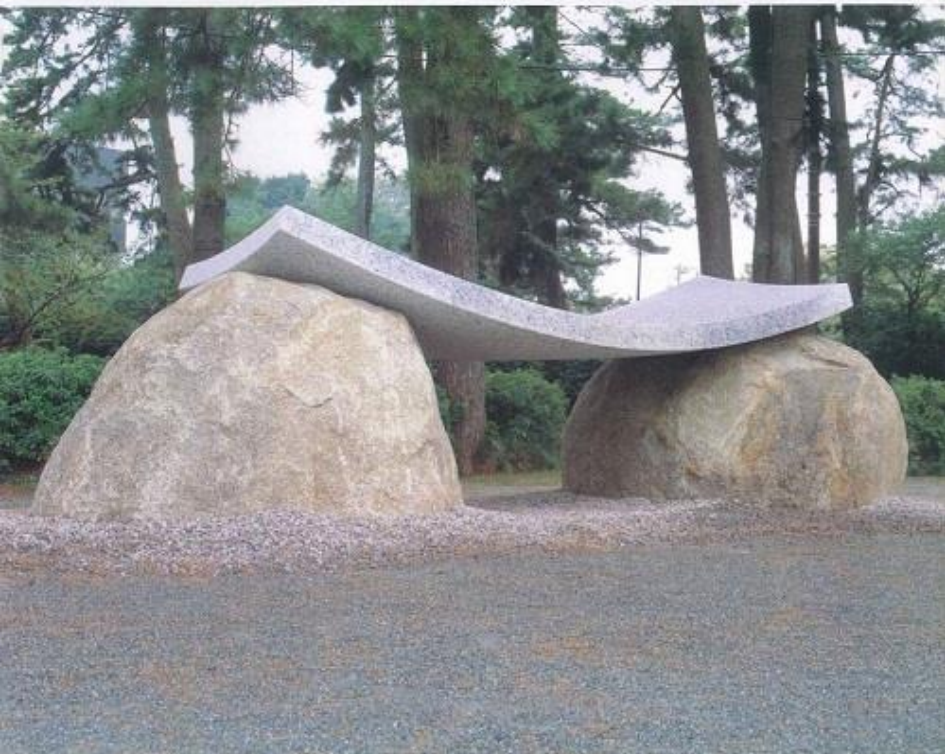
石の彫刻展シンポジウムに参加（香川）

美濃加茂彫刻シンポジウム「彫」に参加（岐阜）

1989 第4回ヘンリー・ムーア人賞展出品（神奈
川）

フォルクナー・ビル国際彫刻展シンポジウムに
参加（スウェーデン）

石の塊を少しづつ削り取って、境界まで薄く
してゆき、紙のイメージに近づける。そうする
ことで石の硬さや重さからの解放を図った。





サナダサダヲ ■ SANADA SADAO

作品 = 90W02 ■ work = 90W02

ハネ鋼、FRP に着色、その他

単体大 H 175 × 220φ 小 H 150 × 119φ

水面上最大可動範囲 W 1,730 × D 1,100

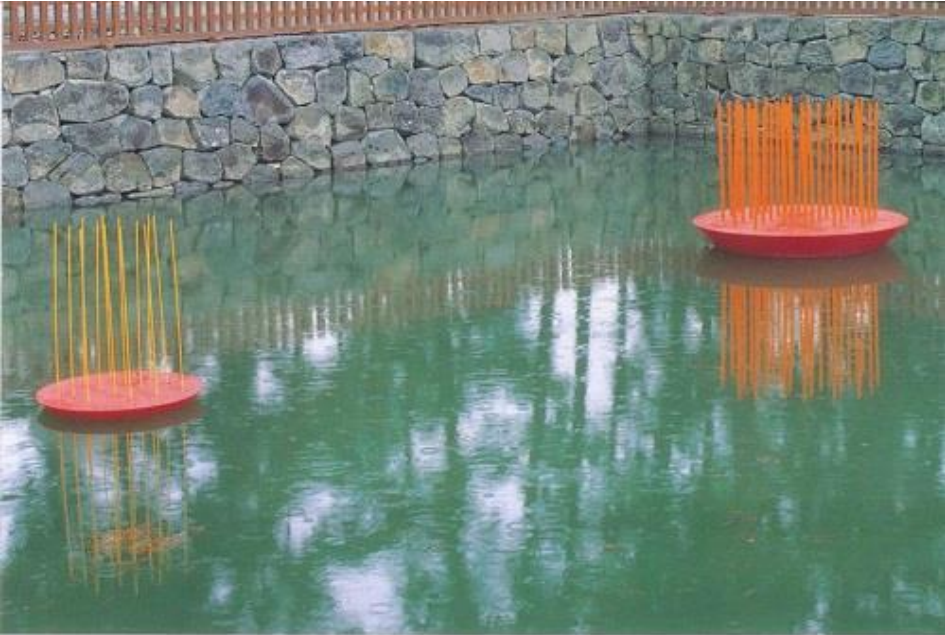
- 1808 香川県立まれ
- 1812 第24回二紀会展 (80.5.1)
- 1860 第1回びんご現代彫刻展 (マナツ)展
- 1861 第1回びんご現代彫刻展 (芸賞展知事賞)
- 第26回行動美術展 (新入賞)
- 以後毎年出品 (96・98受賞)
- 1992 行動美術新人展出展
- 新展グループ展 (75・76・97・98.5.)
- 1993 第16回神奈川県美術展 (74・75.5.作品)
- 1994 第1回日本国書展出展
- 新展彫刻研究会 (松西賞)
- 1995 第17回現代日本美術展
- 1997 作野野島彫刻展 (マナツ)展
- クロスワード・イン・望月



20世紀末
1990年

日本
神奈川県
小田原城

流れる園 落ちる雨
次く蒸 せらぐ水園
私のリアリズム
大気の呼吸を
作品に見る





末田 龍介 SUEDA RYUSUKE

風の標識 WIND OF SIGN

花園君 (北本石)

H 400 x W 108 x D 80

1919 美術学生より

1954 東京芸術大学芸術学部彫刻科
建築設計事務所に入内務建築師等の制作に
当る

1963 日本総合工用設計士
1970 新制作スペースデザイン展 (日経新聞) に
支持作品を初出品、以後連続入選

1972 グループ展 (東京)

1973 新制作制作家賞受賞
二人展 (東京)

1974 グループ展 (東京)

1975 新制作スペースデザイン 協会員展
第1回現代日本美術展に支持作品を出品

1980 大分県に緑丘石彫を始める

二人展 (大分・熊本)

1981 大分県美術館に彫刻制作発表会を主催し
して彫刻美術展を設立制作選抜になる

1986 新制作スペースデザイン展を協賛

1989 かながわ石彫コンクール入賞、石彫シンポジウムに参加

1989 大分県立の研究機関センターにコミュニ
ティ講座

九州自治体コミュニケーションフォーラム
に参加

1990 かながわ石彫シンポジウム作品「風の門」
を芸術文化財団に寄贈入館に設置

石の属性

石が重く大地を圧するとき、之を浮上させ
たく想い

石が堅固な形を持つとき、之を形のない風
に向わせてく想い

石がどこまでも下向する意志を主張する
とき、之を上昇する気流に乗せたく想い

石が均質安定を志向するとき之を不安の群
れにかけたく想う

はてはて厄介な片





中岡慎太郎 ■ NAKAGAWA SHINTARO

兵ども ■ TSUBAMONODOKORO

花岡君

H 250 × W 120 × D 100

- 1977 岐阜県に生まれる
- 1980 多摩美術大学彫刻科卒業
- 1981 第3回彫刻の彫刻シンポジウム (札幌)
- 1982 第4回彫刻の彫刻シンポジウム (札幌)
- 1983 北海道の彫刻展シンポジウム (札幌)
- 1984 岐阜県現代彫刻展 (岐阜市)
- 1984 所沢野外彫刻展 (所沢市)
- 1987 白子町石彫シンポジウム (白子)
メタリウムアート 現代野外彫刻展 (人間社)
- 1988 第1回石のまじフェスティバル (香川県)
第1回神戸国際彫刻協会公開現代彫刻エキスポ
ス展 (神戸)
- 1989 本子彫刻シンポジウム (東京)
- 1989 第2回現代日本民衆彫刻展 (千葉県文楽舞
台)
彫、舞、染白—今日の表現から (埼玉県立
近代美術館)
アート、スキヤイクインゲン30 (埼玉県立近
代美術館)
Japanese Way Western Means (タイムズ
ランド別荘美術館)
神戸民衆彫刻大賞展 '89 (神戸)
第1回現代日本彫刻展
六甲アイランド CITY 彫刻展 (神戸)
ヨーロッパビエンナーレ'89 (横浜)
第4回国民文化祭さいたま国際芸術フェスチ
バル (埼玉)
- 1990 第3回ロダン大賞展
第2回倉敷まじかりの彫刻展
その他、個展、グループ展

小浜原城という歴史的な場所に置かれたとき
に、しげんとその首をイメージさせるもの
存在を創ってみたい。





藤原吉志子 ■ FUJIWARA YOSHIKO

卵を生む家 ■ The house which lays eggs

ブロンズ

H 185 x W 160 x D 220

- 1942 東京に生まれる
- 1967 東京芸術大学工芸科卒業
- 1969 東京芸術大学大学院修了
- 1980 グループ展(彫刻センターギャラリー、ニューヨーク)
- 1981 グループ展(あべぎギャラリー、ニューヨーク)
- 1982 グループ展(彫刻センターギャラリー、ニューヨーク)
- 1986 第1回コンテンポラリー賞 (英ナショナル美術館) デュミエール・ブロンズ特別賞
- 1986 個展(ギャラリー・ゼイほう、銀座)
- 第7回現代美術展覧会 (上野の森美術館)
- 1987 第1回日本全国造形作家展 (有光ホール、銀座)
- 個展(大丸、神戸)
- 個展(大丸、東京)
- 第8回現代美術展覧会 (上野の森美術館)
- 第1回日本全国造形作家展 (西ドイツ) 同回展(同日本全国造形作家展 (有光ホール、銀座))
- ドイツ・日本・欧州の現代彫刻展 (京セラ美術館)
- 第2回コンテンポラリー賞 (英ナショナル美術館) 特別賞
- 日本全国美術展 20 (中央美術院、北京) (上海美術家協会、上海)
- 第9回現代美術展覧会 (上野の森美術館)
- 第10回現代美術展覧会 (上野の森美術館)
- 1996 第3回コンテンポラリー賞 (英ナショナル美術館) 特別賞

例えば地球は“パンデラの蛋”⁽¹⁾。愛の卵、海の卵、戦争の卵、象の卵、玉子の卵、木の卵、森の卵、ミエズの卵、貴い卵、涙の卵、熱い卵……コロコロコロコロ生まれて、そしてコロコロ廻ります。⁽²⁾

注①: パンドラの箱と同義

注②: 作者の地球への切ない想いと質問が『卵を生む家』のイメージを生んだのであろう。





二口金一 ■ FUTAKUCHI KINICHI

北へ… ■ To the north…

ブロンズ、青花陶器

H 365 × W 200 × D 150

- 1929 富士原に生まれる
1949・50 日展（彫刻部）
1951～72 朝日会展（彫刻部）
1954・57 北陸美術展で北陸美術賞
1979 個展（高岡市美術館）
1971 個展（中野西郷／守屋）
山日本公園に「大内北野史」の像設置
1982 富山県総合芸術会館に「彫刻」の像設置
1983 神戸芸術祭個人賞展 93（神戸ポートアイランド）で受賞
1984 文芸春秋美術展19作展（高岡市美術館）
1985 神戸芸術祭個人賞展 95
1987 神戸芸術祭個人賞展 97で神戸開港120年記念賞
富山県芸術文化功労賞
1989 第2回ロダン大賞展で彫刻の最高傑作賞（通称最高傑作賞）
1990 神戸芸術祭個人賞展 99でフェリスビッド神戸大記念賞（神戸市立あわせの村）
第1回長良野市彫刻祭賞
1990 兵庫県加西白旗エフラーセンターに「じょんかな」の像設置
1990 第3回ロダン大賞展優秀作マオット賞（彫刻の最高傑作）

北国シリーズ『さよなら』の第3作。長年
心の中で極めてきた心象風景である。
北国の自然との対峙。そこに生きる人々との





②

展覧会会場

- ①お堀 | _____
②馬屋曲輪 ③二ノ丸



③

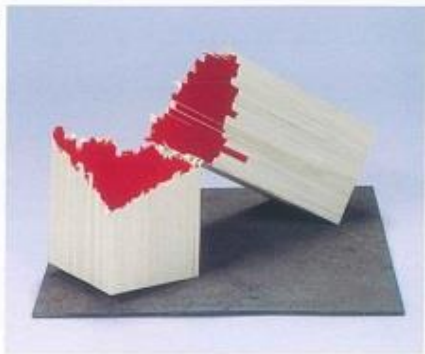
優秀模型作品

池上 賢
Winding Stone



井田 彪
(ring)*

いしかわ れいこう
北陸の血潮



牛尾 善三
空間のメグロウスイー内蔵・360°



安藤 忠雄
石



川島 雄三
幻想 (1978.15)

窪田 俊三
ストリート90-2



櫻井 寿人
passage 892(抱懐)

塩田 純真
海の指標



塚川 厚次郎
静の旋律

藤原 吉人
北条七郎臣(甲曲19)



栗田 美千里
へび

高田 大
男爵



杉浦 康益
陶による岩の群

滝川 邦史
豊饒のビーナス



高橋 克明
LOVE DANCE



竹内 三雄
Transfiguration "LINK" II



田中 大賀志
growing-1



田中 忠夫
宮



外崎 秀昭
△

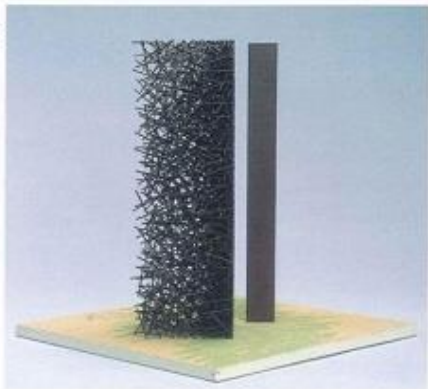
外岡 秀樹
生命 1



西村 百吉
飛ぶかもしれない



古郷 秀一
限定と無限定



長谷川 純一郎
午後のエステイパーク

松本 薫
Cycle00-R1



宮尾 秀人
空へ向かって

村上 章一
振り袖火事



八ツ木 のよ
龍宮の陣貝(象と人)



桂野 朝男
「ペロリソコ」



吉本 昌
「響」

